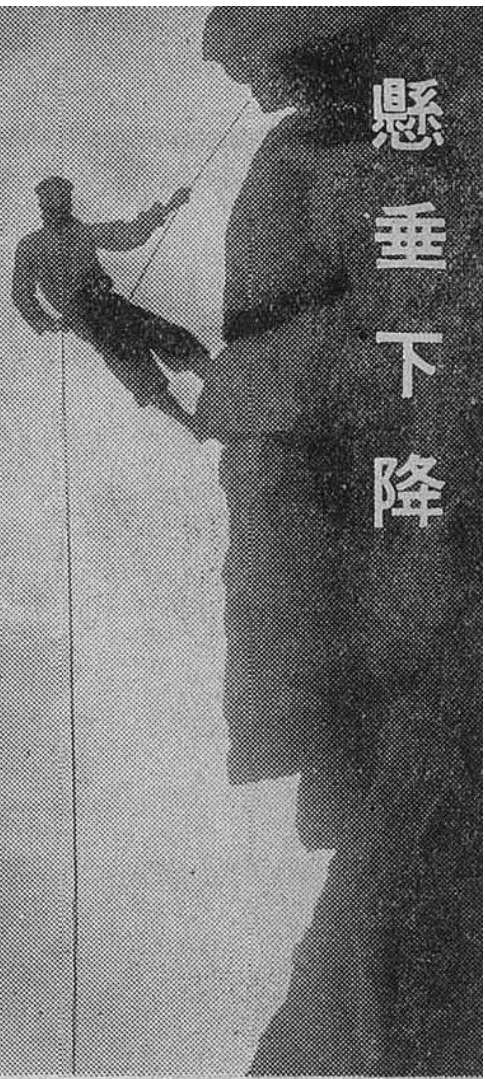


懸垂下降



石岡繁雄

・アブザイレン(九州平尾盛廣谷の岩場)月原俊二

3退却について

登つた場所はどこでも、下ることが出来るということが必要である。逆にいうと、下れないような場所へ来たときには、或は、下降するのに、どれだけの時間がかかるか見當のつかないような場所に遭遇した場合には、たとえそこを登り切れれば安全な歸りのルートがあるという場合でも、全員がそのまま通過してしまふということをせず、まず安全な下降方法の發見に努めるといふことが大切である。よく登攀にゆきづまつて、やむなく退却ということになると動作に慎重さが失われたりして、急に技術が落ちるものであ

法が綿密には考えられていないため、難場を越すにつれて、どうしても登り切らなければという切迫した氣持が強くなり、それがいつしか「何となく恐ろしい」という、困難な岩場特有の心理状態に原因があると思う。こういふ氣持は登攀に夢中になつているときは、闘争心によつて麻痺させられていて表面化しないが、いよいよ登れなくて退却となると、あの場所はうまくおりられるだろうか等といった心配が、一度に頭をもたげてきて、そのための精神的動搖がおこるのである。即ち人間の本能に反した行いであつたがための恐怖が、現實の技術を低下させ、明らかなスポーツの領域をいつか脱せしめることに

る。この原因

には、例えば失敗のための落膽から闘志が喪失して技術が低下するといふようなこともあろう。併し多くの場合、既のべた如く登攀時に、下降の具體的な方

なるのである。

次に技術の低下はどのような形でおきるかといふと懸垂のビレーの選び方、ハーケンの打ち方等が粗雑となり、特にリーダーシップ、メンバースhipに缺陷が出來自信のない行動となつてあらわれるのである。もし、登攀中に下降用のハーケンを必ず打つておくといふような注意がしてあれば、いざ下降となつても下降に要する時間、方法を明確に頭に入れることが出來、精神的に餘裕があつてますます確實明瞭な行動がとれるのである。従つて下降の練習が、登高にも増してよく行われねばならないといふ結論に達する。

(岩場を登り終れば歸路は安全なルートであるといふ場合で、常日頃からそのつもりでなければ、突發事件がおきたり、天候が急變したり、或はバリエーションにいつたりした場合等の、いざという時の役に立たないことになる。従來、懸垂の練習は確保の容易な一定の場所でのみ、くりかえし行われたものである)どんな複雑至難な場所でも、少しも不安なく下降出来るといふ技術は、それに含まれるいろ／＼な要素から考へてその人の岩登りの安全率を高め、その人の岩登りを明らかなにし、且つスポーツ的、科學的なものにするものと信ずる。何事でも不安な部分が残つていては、心からの明瞭さといふものは起きな

岩登り講座

いものである。

(以上のことは、私達も最初から行つていたわけではない。過去七年間、屏風岩明神、前穂高北尾根の四峯と困難な岩場での、しかも風雪中の下降をしばしばよぎなくさせられたため、その経験から得たものである。結局私達はそれが苦しいやりくりの後でやっと得られたというよりな貴重な山行であつても、しかも数少ない快晴の日であつてもこれこそ絶好のチャンスなどとは考えず、むしろ、まず成功しないだろうという気持ちで出かけるというくせになつてしまつた。従つて峻峻な壁での退却はもともと覺悟の上であり、登攀中にいつも退却を考えているのでさあ退却になつても、別に心配はないわけである。考えてみれば誠にスポーツ的でないようであるが、このくせがつくと結構これで楽しいものである)

一般に下降の技術は、登攀に比して格段にむずかしい。特に懸垂下降は、下降技術のうちの最後の段階であり、技術的にも、心理的にも最も困難な要素をもつている。今、懸垂下降についてのべてみることにする。懸垂下降を思い浮べる度に、いつも不安に感ずるのは次のようなことである(結局これらのことがらが退

却をしぶらせ、岩登りそのものを不安にしているように思う)

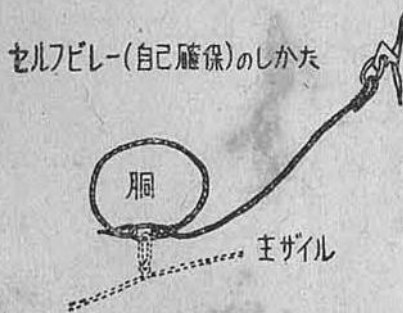
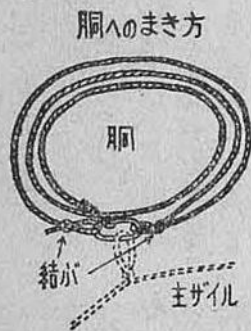
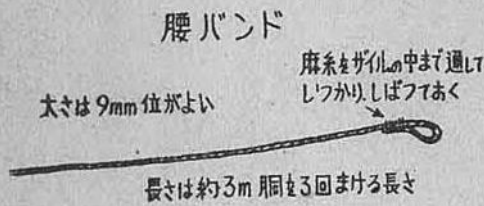
a、懸垂の場合には、お互のザイルをはずしてしまふのが普通である。一方困難な岩場では、自己確保はいつも行われているというのが原則の筈である。このザイルをはずして自己確保が出来なくなるといふことは、懸垂下降の最大の缺點である。自己確保がなくなれば、どうしても動作がにぶくなるのをまぬがれない。

特に懸垂下降の場合は、困難な場所でも精神的にも負擔の大きいのが普通であるから、ザイルをはずすことは特に弱い隊員を完全に萎縮させ無力にしてしまふ。これを防ぐ

ために、私達は従來のようなアンザイルをせず、各自、約三米の腰バンドを圖の様に付け、これにカラビナで主ザイルに連絡するようになっている。懸垂下降のように、或はザイル横断のように、主ザイルをなさなくてはならないような時は、直ちにこれでセルフビレーするわけである。又この腰バンドは吊り上げの補助となつたり、あぶみのかわりになつたりして誠に好都合である。

b、一般の登攀ではザイル、ハーケン等に全體重をかける機會はまずない。併し懸垂下降では、岩角、ハーケン、ザイル等に全體重(下降の際少しも速度に變化があればその影響が加算される)をかけることになるので、それら

への科學的な觀察を無視するわけにはゆかなくなる。即ち、登攀の技術の他にこうした技術が重なるわけである。普通にはこうした



技術は科學的な基礎知識からでなくて、單に先輩からの教示と經驗によつて修得されている。

考えてみればハーケンの入り方はどの位なければ危険であるとか、

(ハーケンが深く入つているから安全だとはいえない。何となれば打ちこまれたハーケンの全表面積が、岩に接觸しているかどうか疑わしいからである。又一枚の板に打たれた普通の釘にぶら下つてみたつて決してぬけるものではないことかから考えても、力一ぱい打たれた岩とハーケンとの摩擦は、たとえ接觸面積が小さくても相當大きな力に耐えるだろうといふことは常識的にも想像される)ハーケンの喰い入る龜裂そのものが、ハーケンの浸入と共に幅を變

ある登攀から

谷合 晃

雨が顔に手に、たゞきつける様に降りそゞいで来る

ルンゼは既に一本の瀧に變つて私をよせつけ様とはしない

小さなテラスも

もうすでに五尺の身體には狭くなつてしまつた

ザイルで身體を岩にしばりつけてじつと待つ身のつらさ

西の方の尾根には

陽が射しているのに
此處では
雨が私をたゞき落そうと
降りそゞいで来る

遭難!

私はテラスに腰を降した儘
雨の過ぎるのをじつとまつていた

次には悪場が私を待つている

普通うまく打ちつゝあるかどうかは、いわゆるハーケンの歌う音によつて判断が出来る。

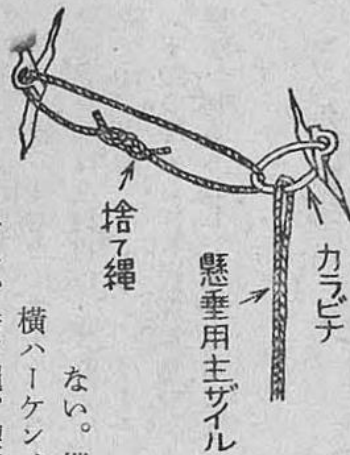
化してゆく。即ち打撃のエネルギーがハーケンと岩との接觸部分の歪を増すことに消耗されずに、龜裂の幅を擴げることに使われているようなことはない

かとか、或はハーケンと岩との間にはさまれた砂粒のようなものを粉砕するのにエネルギーが消耗されていくのではなからうかといつたことは懸垂下降の場合に一應不安にさせられることからであり、又この種の遭難の實例は幾多も存在している。

これを防ぐには、ハーケンを打つべき岩の龜裂を慎重に調べることでも大切だが、特にハーケンの入り具合をよく注意することが肝要である

龜裂の幅が變化してゆくような時の音は全くなつていない。併し歌う音がよくなるでも確實な場合もある(ハーケンの種類によつてはよく歌わないものがある)結局正しい訓練による以外に上達の道はないが、いずれにしてももしハーケンに信賴がもてないと思つた時は、まあいいだろうという氣をおこさず、

ゆつくり終日でもねばるつもりで完全だと考へるまで落ちついてやらねばならない。特に適當な打ち場所がない時は、龜裂の方向を考え二本以上のハーケンの力に分割させねばならない。縦ハーケン



横ハーケン、岩角、カラビナ、捨て縄、楔等を巧みに組み合わせることが必要である。(圖参照)

c. 懸垂下降は落石の方向と、一致するので、ザイルと岩くずとの接觸等による落石は、しばしば致命的となる。(私は、この落石に打たれて以來懸垂下降を思い出す度に不愉快になる)最初に下降する者は(實際には登高のとき既に下降を考えねばならぬので、

最初に登高する者とはいうことになる。浮石を安全な場所においたり、危険のない場所に落としてやるなどの注意が必要である。いわゆるバツタ懸垂と稱する二、三米づつ飛躍して下りる方法などは勿論論外で、懸垂はそれこそ祈る氣持で下りるべきであると思う。

特に懸垂を終つて後續者が下降して下るのを待つ場所は、落石に對して安全でなければならぬ。又下り立つた附近が相當危険な場所である場合は、懸垂のザイルから離れずに、まづ自己確保用のハーケンを打ち自己確保した後で主ザイルをはずすことが必要である。この操作を怠つたために後續者をまつている間に轉落した例が最近發生している。

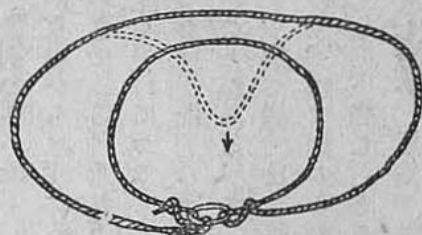
d、最初の者が降下したならば必ずザイルが支點からはずれるかどうか試してみらるべきである。垂れ下つた二本のザイルが全く平行におりてきているような時でも、わずかな岩の摩擦でどうしても離れないことがある。かつての實例ではハーケン、捨て繩ではすべりが悪からうというので、捨て繩のかわりにカラビナを使つて全員下降したところ、ザイルがビクともしない。結局ザイルを放棄することになつたが、こういう例もあるので、

最初の者が降下したならば必ず動かしてみることが最も大切である。又下の足場が悪くて大きな動作が出来なくて困る場合もある。この點でも腰バンドによるセルフビレールがあれば安心して行えるのである。

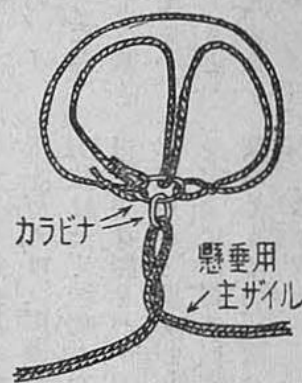
e、懸垂方法は普通肩がらみであるが、この方法の欠點は、雨の中とか特に風雨の中ではすべりが悪くて不愉快きわまるものである。經驗のない人には想像以上である。かつて谷川岳マチガ澤の下降で、ザイルのすべりが悪くやむなくザイルを手で握つたまま下降し途中で手が離れて墜死した例がある。又苦痛をしのんでどうにか下り得たとしても疲労不愉快のため、前途を不吉なものに思いこんでしまひやすいのである。

ナイロンザイルはこの點全く解決してくれらるものであるが、それよりも前記した腰バンドで、最近發表されている新型懸垂方法の變形を行えば(圖参照)實に氣分がいい。この方法は全く苦痛がなくザイルのすべりも緩急自在で身體をバタつかせる必要もなく、これが懸垂かと疑がわれるほどである。この方法を完全に修得すべきであると思う。尙これに圖のように前記腰バンドを使用すれば腰バンド、セルフビレール、懸垂姿勢とこの三者間の移行が自由自在で、懸垂への興味も倍加する。

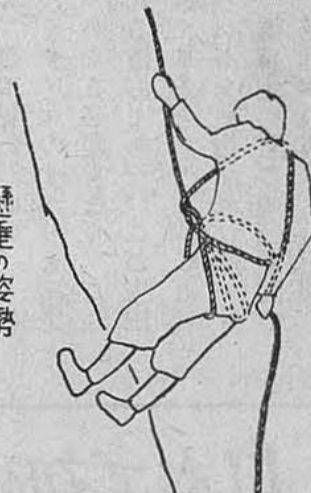
懸垂のしかた



胸へ3回まいたのを1回だけはずして
桌線のように股の下をくぐらせて前へする



カラビナ
懸垂用主ザイル



懸垂の姿勢

(左きみの人の例)

f、懸垂は最大傾斜への下降はよいが斜めの下降は不可能の場合がある。このような場所を登るときには、下降にそなえて豫め細引をはつて残しておくべきでこの操作がしてあれば細引をガイドにして下ることが出来、目的の場所への降下が容易となり下降の不安はなくなる。以上要するに最も複雑困難な懸垂下降を科学的に考察し、よく熟練して完全にマスターすることは岩登りを朗らかなスポーツとする具體的な方法と思う。併し下降の練習はよき指導者のない場合はよく岩になれ、すべてに冷静な判断が出来るようになつてから行われねばならない。

4ザイルパーティーの構成人数について一本のザイルにつらなる人数は、従来

容易な岩場では初心者の練習もかねて、三名、四名でもよいとされているが、困難な岩場では二名がよいとされていた。その理由の主なものは、三名の場合は二名の場合より殆んど二倍の登攀時間を要するからである。併し欠点は、トップがスリップしたとか一名が負傷したとかいつた、かなり特殊な例の場合に致命的な危機におちいることが豫想される。それにも拘らず二名の方がよいとされるのは、二名の方が三名の場合より成功率が高いからである。併しここで重要なことは、このことを通じて従来の岩登りに對する考え方のあいまいな點が看取されるのではないかと思われること、(おそらく私の認識不足であるが、私と同じような人があるかもしれないと考えて記すことにする)

即ち既に述べた如く、岩登りを人間の本能に立脚した真に明朗なスポーツとするためには、このようにスポーツと危険防止とが離反する場合に原則的には、あくまでスポーツを捨てて危険防止をとらねばならないことを強調せねばならぬ筈と思うが、この困難な岩場における二名、三名の論争には多分にこの點があまりでないかと愚考するわけである。(要するに二名、三名の論争では危険の範圍をどこにみるかということについて、詳しく記されていなければならぬと思うが、従来の技術書ではこの點に、不満があり又誤解が生ずると思う)

結局、問題は何度も述べた如く、考えられるすべての場合に處して如何に安全に登攀出来るかということであつて、如何にして成功をかちうるかということであつてはならない(勿通外観的には)

安全な登攀形式における成功のみが眞の成功といふ筈である。

従来、登攀は、例えば三名のパーティーの場合、行動するのは一名だけで他の二名は行動者の確保にあたることになつてゐるが、少くとも現在の形式においてはこれは再考される必要があると思ふ。

トップが墜落した場合、これを停止させるのはトップが自ら行った操作のみであつて、後続者は何の役割りもしていない。(この點認識不足から過去において實に多くのトップを墜死させている)

即ちトップの安全確保はトップ自身によつて打たれたごく近くのハーケン、又は岩角のビレーのみであつて、セカンドの、トップへの肩確保又はトップから十米も下に打たれたハーケン及びセカンドのセルフビレー等は、トップの安全に全く無關係といつて過言ではない。(最

近、動確保の理論が示す如く従來の確保技術には多分に非科學的な部分があると思う)

勿論セカンドはトップの行動に對して例えば、吊り上げの場合にザイルを引くとか、ザイルが岩角にひっかからないように適宜くり出すことは必要であつても、二人がトップの行動をぼんやり(?)眺めていることは意味が少いと思う。私達の間では三名のうち一名だけが完全なセルフビレーを行い、他の二名は特に支障のない限り出来るだけ同時に行動することにしてゐる。(三名の登攀の實力がほぼ等しいことが必要である) トップさえ登つて

しまえば又パーティー個々の實力に大きな差がなければ、トップの後をたどることは比較的容易であり、又後続の二名が同時に行動することの可否についてはトップが登攀するときに判るのである。これによつてボンヤリ待つてゐる時間を少くし、殆んど二名の時と同じ速度で登攀が可能となる。(昨夏、このような登攀方式によつて屏風岩第一ルンゼの完登を横尾テント地から往復七時間二十分で終了している)

(つづく)